

# シンガポール華人廟におけるヒンドゥー神の習合

二階堂 善 弘

## On Syncretism of Hindu Gods in Chinese Temples in Singapore

NIKAIDO Yoshihiro

I researched on syncretism of Hindu Gods in Chinese temples in Singapore. In Singapore, I researched to fieldwork for Loyang Tua Pek Kong Temple, Jiu Tiao Qiao Xinba Nadutan Temple and Hup Choon Kek Hock Huat Keng Temple. Some temples worship Hindu god Ganesha. I think Ganesha is “God of Wealth”, so widely accepted Chinese people.

キーワード：華人廟、シンガポール、ガネーシャ神、大伯公

### 1. シンガポールの華人廟

シンガポールやマレーシアの華人廟では、中国大陸や台湾・香港などの廟とは異なる点がある<sup>1)</sup>。たとえば、シンガポールやマレーシアの土地神の廟は、一般に「大伯公廟」と呼ばれることが多いが、この称は他の地域では見ることの少ないものである。また、マレーシアの精霊ダトゥは華人廟に習合されて「拿督公」として祭祀されている。拿督公は、いまでは華人廟のなかで普遍的に見られる神となっている<sup>2)</sup>。

シンガポールにおいては、様々な宗教施設が併存する様子が見られる。キリスト教の教会、イスラム教のモスク、ヒンドゥー教の寺院、仏教の寺院などが、かなり近接して建てられている。仏教の寺院も、中華系、タイ系、ミャンマー系などの種類があり、またヒンドゥー寺院も北方系もあればタミル系も強い。

---

1) シンガポール・マレーシアの華人廟については、ケネス・ディーン・許源泰『新加坡華文銘刻彙編1819-1911』（広西師範大学出版社2017年）、許源泰『沿革と模式：新加坡道教和仏教伝播研究』（八方文化創作室2013年）を参照した。またさらに、「Singapore Chinese Temples 新加坡廟宇」（<http://www.beokeng.com/>）、「AngKongKeng.com」（<http://www.angkongkeng.com/>）などのサイトについても参照している。

2) 大伯公や拿督公については、窪徳忠「東南アジア在住華人の土地神信仰」（『窪徳忠著作集』8巻・第一書房1999年）337-368ページ参照

これらの宗教施設は、それぞれ独立して活動を行うのが基本であり、協力することは少ないようである。むしろ、仏寺が共同で行事を行うことは多く、ヒンドゥー寺院の祭りも各寺院が協力して行われる。ただ、ヒンドゥー寺院と仏教寺院が共同で行事を行うことはあまり見なかった。また、華人廟においては、神仏の習合が行われるのは一般的であるが、他の宗教との共同の祭祀などは少なかったように思える。

しかし、いくつかの華人廟においては、ヒンドゥーの神々が中華系の神々と同居して祭祀され、中華系、インド系のそれぞれの信徒が同時に双方の神を拝むという現象が見られた。

この例でよく言及されるのは、ブギス付近の観音堂 (Kwan Im Thong Hood Cho Temple) とスリ・クリシュナン寺院 (Sri Krishnan Temple) の関係である。この両寺院は繁華街のなかにあり、観音堂はいつも参拝客であふれているような寺院である。両寺院は隣にあると称してもかまわないくらいの近距離にあるため、観音堂の参拝客の多くが、スリ・クリシュナン寺院のほうにも参拝していく。

とはいえ、隣接した華人廟とヒンドゥー寺院の大多数は、通常は没交渉である。一般にヒンドゥー寺院では、僧侶の祭祀する内陣については、信徒以外の立ち入りを禁じていることも多い。

しかし、華人の民間信仰とヒンドゥー教の信仰が双方ともにひとつの廟で行われる例も、少数ながら存在する。ここではシンガポール東部の洛陽大伯公宮など、いくつかの例を取りあげ、華人廟におけるヒンドゥー神の習合について検討したい。

## 2. 洛陽大伯公宮について

洛陽大伯公宮 (Loyang Tua Pek Kong Temple) は、シンガポールの東部、チャンギ空港からそう遠くないところに位置する廟である。ただ、交通の便からすると、あまりよい場所とはいえない。

その由来などについては、廟のサイト (<http://www.lytpk.org.sg/>) に詳しい記載がある。



洛陽大伯公宮サイト

それによれば、1980年代から廟は道教・仏教、中華系の民間信仰、ヒンドゥー教の神々を並べて祭祀する形で始まった。1996年に火災に遭って焼失したものの、2000年に再建された。現在の位置に移転したのは2007年のことである<sup>3)</sup>。それほど古い歴史を有する廟ではない。ただ華人廟にしては珍しく「24時間営業」を行っている。



洛陽大伯公宮

廟の主神は大伯公である。併祀される神々は、七爺・八爺、天后媽祖、文昌帝君、孔子、地藏菩薩、観音菩薩、拿督公、そしてガネーシャ神である。このように、道教・仏教や民間信仰の神々に、ヒンドゥー教の神を加えるのがこの廟の特色である。宗教職能者も、華人系の法師、ヒンドゥー系の僧侶がともに存在している。



洛陽大伯公宮の大伯公

3) 「洛陽大伯公宮サイト」(<http://www.lytpk.org.sg/about.htm>) 2018年12月閲覧

参拝客も、インドのタミル系、中華系の人々が混在して訪れる。そしてタミル系の人々は中華系の神を、中華系の人々はヒンドゥーの神をといたぐあいに、双方の神々を拝んでいく。多民族国家シンガポールを象徴するかのような廟である。

とはいえ、ヒンドゥー僧侶が祭祀を行っている内陣については、通常はヒンドゥー教の信者のみが入れる所であり、そこはやはり区別がある。



ガネーシャ神を拝む中華系の信者

### 3. 九条橋拿督壇と合春格福発宮

洛陽大伯公宮のようなヒンドゥー系、華人系複合の廟は、シンガポールにおいて他にもいくつか存在する。

九条橋拿督壇は九条橋新芭拿督壇 (Jiu Tiao Qiao Xinba Nadutan) と称され、1927年に創建された廟である。ただ、2004年からは、いくつかの廟とともにタンピネスの一角に移っている<sup>4)</sup>。

4) 「Singapore Chinese Temples 新加坡廟宇」(<http://www.beokeng.com/>) の記載による。2018年12月閲覧





九条橋拿督壇の内部

祭祀される主神は拿督公、大伯公である。主神の脇には、ガネーシャ神の像が鎮座する。このように、中華系のパントオンに混ざる形でガネーシャが祀られるのは、珍しいかもしれない。



九条橋拿督壇のガネーシャ神

さらに、イーシュンにある合春格福發宮（Hup Choon Kek Hock Huat Keng）も特徴的な廟である。こちらは1990年代に整理された聯合廟である<sup>5)</sup>。

---

5) 聯合廟については、筆者「シンガポールの華光大帝」（『東アジア文化交渉研究』関西大学大学院東アジア文化研究科第10号2017年）424-425頁参照



福発宮の内部

中心になるのは大伯公である。この福発宮の隣に隣接してヒンドゥー寺院があり、多くのタミル系の住民が参拝していた<sup>6)</sup>。



福発宮に隣接するヒンドゥー寺院

#### 4. ガネーシャ信仰との関連

華人廟において祭祀されるヒンドゥーの神は、調べた限りではガネーシャ神の場合が多かったように思える。シンガポールでは南インドのタミル系の信者が強いため、その影響を受けてのことと考える。一方で、ガネーシャ神は華人の間では「財神（福の神）」であると考えられており、おそらくそのために祭祀されている可能性も高い。なお、シンガポールではないが、タイにおいてやはりガネーシャ神を華

6) この寺院は、Sri Veeramuthu Muneeswarar Temple という名であり、Mariamman 女神などを祀る。

人廟で祀る例もあるようである。

これについて、玉置充子氏は次のように述べる<sup>7)</sup>。

地図で適当に目星をつけた華人廟の近くまで来ると、なにやら賑やかな音楽が聞こえてきた。そのまま道を進むと目の前に華人廟が現れた。それほど大きくはないが、日曜日でもないのに大勢の人で賑わっている。どうやら祭りのようだ。本堂の入り口にはタイ文字とともに漢字で「巴比加尼宣」と書かれている。中に入ってみて、この名前の意味がわかった。内部は普通の華人廟と変わらない造りだが、祀られているのは華人廟で見慣れた仏教や道教の仏神ではなく、ヒンズー教の神ガネーシャなのだ。「加尼宣」というのはつまりガネーシャの漢字表記だった。(略) Jさんに、なぜ華人が華人廟でガネーシャを祀るのか聞いてみると、華人文化とタイ文化がミックスした結果だというような答えが帰ってきた。ただ、彼女自身も廟の起源や謂れは知らないようだった。ガネーシャが祀られていても、祭りに集う信者は華人ばかりで、廟の様子も参拝の仕方も他の華人廟と何ら変わるところはない。台湾や福建にもある願掛けの道具「ポエ」もある。また、本堂のほかに観音を祀る小さい堂があって、中にはやはり初老の華人女性が観音の扮装で座り、信者の礼拝を受けていた。筆者は、東南アジアではほかにガネーシャを祀る華人廟が存在するのか、寡聞にして知らない。

実際に、あまり例は多くないと考えられる。むしろシンガポールでも、洛陽大伯公宮のようなスタイルはそれほど一般的ではない。また、ガネーシャ神が祀られるのは、やはり財神として扱われているからだと考える。

これについて、むしろ想起されるのは、日本での例であるかもしれない。日本では、ガネーシャ神は聖天、あるいは歓喜天という名称で、仏教の諸天のひとつとなっている。

聖天を祀る有名な寺院といえば、生駒の宝山寺がまず思い浮かぶ。「生駒の聖天さん」と呼ばれる代表的な寺院である。その信仰について、新田義圓氏の文章はこう記す<sup>8)</sup>。

民間にあっては蜜柑で名高い紀伊国屋文左衛門、大阪の豪商で、今も淀屋橋にその名を残す淀屋辰五郎、淡路の出身で幕末北海道で大活躍をした海運業者高田屋嘉兵衛など、いずれも聖天を祈って大をなした人達である。(略) 元禄年間幕府の許可を得て四国の別子に銅山をいとなんだ住友家が、その事業反映と家運隆昌を念じて寄せた祈祷の依頼文や、当主の病氣平癒を頼んできた手紙が二十通程生駒聖天さんに残されている。また、堂島の米問屋仲間が組合をつくって熱心な聖天信仰を続けたあとを物語る文書も宝山寺に見られる。これをもって見ても、関西における聖天信者層の広さが推察できるのであろう。

7) 玉置充子「タイ南部の華人廟つれづれ」(拓殖大学 <http://www.cocs.takushoku-u.ac.jp/nl4/3.htm>) 2018年12月閲覧

8) 新田義圓「聖天信仰の本義と時代背景を求めて」(宝山寺 [https://www.hozanji.com/img/shouden\\_hongi.pdf](https://www.hozanji.com/img/shouden_hongi.pdf)) 2018年12月閲覧

宝山寺の本尊は不動明王であるが、実際には聖天の信仰が強かったことがうかがえる。いずれにせよ、関西の商人の間で「福の神」としての尊崇が大きかったことがわかる。これは、実は華人廟における役割とそう変わりはない。

これとは別に、山崎の天王山に位置する観音寺も、「山崎の聖天さん」として知られており、山崎聖天と称されている。

ただ、聖天にしろ、大黒天にしろ、毘沙門天にしろ、中華系の仏寺や廟では、現在は福の神として扱われることは少ない。その役割は、財神の趙公明や関帝に移ってしまっている。このあたりの変遷については、また他において論じてみたい。